



泉 雅文

(いずみ まさふみ) 1998年東京大学医学部卒業。東京大学医学部附属病院脳神経外科、埼玉医科大学総合医療センター脳神経外科、NTT東日本関東病院脳神経外科・脳卒中センターなどを歴任。2007年より北青山Dクリニックにて診療にあたる。武術の鍛錬を日夜欠かさない超・体育会系。共著に「脳の病氣一名医の言葉で病気を治す」(誠文堂新光社)。



ドクター Vol.2 Recipe for the Future 哲学

最先端アンチエイジング

日々進化し続けるアンチエイジング医療の現場で医師たちは、今、何を感じ、何を発信しているのか。メディカルプロデューサー今井義博が聞く、アンチエイジング・ドクターたちの最新哲学。

photographs by Yamamoto Hiroaki

よりよく生きるために医師ができること

人を診る

NTT東日本関東病院脳神経外科・脳卒中センターほかを経て北青山Dクリニックへ勤務、アンチエイジング医療にも携わる泉雅文氏。

これまでの経験をふまえ、培われてきた医師としてのあり方、その哲学をうかがった。

メディカルプロデューサー今井義博(以下、今井) 泉先生は、脳神経外科医でいらっしやいますが、医師として一番大切にしていることはどう

いうことですか？

泉雅文(以下、泉) 一番重要視するのは、「その人の人生を考える」ということですね。脳神経外科ではたぶん他の科よりも患者さんの生死に関わる場面に立ち会うことが多いと思いますが、どのような状態であつても、できるだけその人らしさを大切にしようと思つています。以前は治す事自体に固執していましたが、医療は万能ではないし、自分ができるところの限界もある。患者さんがどの

ようにしたいか、どうすればより良く生きられるかということも含めて考えるようにしています。

今井 「人を診る」ということですね。泉 そのうです。実際そのように考えるようになったのは、自分の父親が亡くなってからです。胃がんとわかった時にはもう末期でした。そのとき感じた医療に対する期待や不安。自分が患者の家族になつて初めて理解できることがありました。

今井 身近な方の死を経験した上で、「よりよく生きる」ための——これはアンチエイジングという考えにも

繋がるかと思いますが——医療を患者さんに提供するとしたらどのようなことでしょうか。

泉 その人が生活する上での身体の不具合や痛み、心配を取り除く、ということですね。しかし実はそのためには患者さん自身の努力も必要です。富裕層の方でよくいらつしやるのが「自分の健康のためなら金はいくらでも出す。でも努力の部分は妥協したい」というケース。楽して健康を維持したいと(笑)。例えば脳の病気で、ほとんど脳卒中なんです。そ

して、三大疾患といわれる悪性腫瘍や虚血性心不全と脳卒中は同じような要因なんです。つまり血管が詰まってしまうことが要因になる。それを予防するには正しい生活習慣しかありません。みなさん「いきなり病気になる」とおっしゃるけど、実際は身体に症状は出ていなくても血圧やコレステロール値が上がつているなど「下地」はあるんです。

今井 私のことを言われている気がするなあ(笑)。

泉 北青山DクリニックではMRI

脳はすぐにサボろうとする。タスクの多い作業が老化予防になります。

による脳ドックを行っています。その画像を診断して脳疾患予防のためのアドバイスをしています。

今井 泉先生は椎間板ヘルニアのレーザー治療もなさっていますね。

泉 ええ。PLDDDという最新レーザーで、神経を圧迫する髄核にレーザーを照射する方法です。椎間板ヘルニアを患っているながら「手術するほどではない」と診断され、痛みを我慢するしかなかった患者さんにはおすすみたい治療法です。つらかった症状が、楽になり、快適な生活を取り戻せるケースが多いのです。

今井 短時間での治療が可能なのですね。

泉 一般的な入院による椎間板ヘルニア手術の場合、通常一カ月の入院が必要ですが、レーザー治療だと身体への負担も少なく、一時間程度で終了します。その日のうちに帰宅できる「日帰り治療」が可能です。現

在、健康保健が適用されないのですが、もっと多くの患者さんがこの治療を受けることによって正しいデータが得られ、治療費も下がってくると思います。

今井 国が医療の情報公開を制限せず、患者さんに選択肢となる治療法の情報を広く公開できるような制度が必要ですね。

武術と医術

今井 先生ご自身が個人的に行っているアンチエイジング法は、何かありますか。

泉 アンチエイジング、という観点ではないですが毎朝二時間走って武術の稽古をして、診察に向かいます。武術の稽古は、欠かすとダメなんです。止めるのが怖い(笑)。食事は三食抜かずに食べて、夜に食べ過ぎないようにしています。

今井 武術はいつころから？

泉 子供のころから空手や柔道をしていて結構強かったですよ(笑)。武術というものに本格的に目覚めたのが高校二年のときです。力自慢だった私は、ある老師範にあつけなく投げられたことで世界観が変わりました。武術は体力ではなく技術なんだと。はじめて「術」というものを知り、一生究めていけるものだと思います。それぞれの動き(動作)をまとめると技になり、技を高めるのが術なんです。術が上がれば精神性も上がります。

今井 「医療術」においてもその考えは当てはまるのでしょうか？

泉 医療においても、術を高めることが重要だと思います。医療の技術が高まれば提示できるものが変わりますから。

脳のアンチエイジング

今井 ところで、脳の老化を防ぐ方

法は具体的にはあるんですか？

泉 脳機能の劣化というのは血管性のものが多いんです。末端の血管性滞らせないことです。それと誤解されていることが多いんですが、脳というのはコンスタントに性能を発揮し続けることができる臓器なんです。でもリズムを害すると動かなくなる。食事時間がバラバラだとか、寝ないというのにはリズムを非常に乱します。また作業のタスクがワンパターンだと、脳というのはだんだんサボろうとする。人間が、初めて行う動作——ひとりですつとか自転車に乗るとか携帯電話を使うとか——は、難しいけれど、一旦できるようになると脳はもう考えなくなる。脳の老化を防ぐためには「携わる作業の数」を増やすことです。

今井 なるほど。

泉 例えばピアノを弾くとか、自分の感触で変化する音を、耳で聞き取

るとするのは、一度にたくさん作業が発生します。

今井 読書はどうですか？

泉 読書はどちらかというと受動的動作なので。テレビよりはいいですが、自分の脳が「やりなれないこと」をする方がいい。

今井 文章を書くのは？

泉 構成を考えたり、単語の配置を考えるという作業はいいですね。でも一番、脳のためにいいのは全く知らない人と話をする。これは意外と難しい作業です。相手の顔や声のトーンとか表情を見ながら自分の経験と照らし合わせて、「今度はこう言った方がいい」などの判断を前頭全域で猛スピードで行っています。このとき脳は大忙しです。このように脳がサボれない状況を作ってしまうことです。



今井義博
(いまいよしひろ) 株式会社キーステーション取締役。医科歯科クリニックの開業支援とプロデュースを専門的に行う。本誌メディカルプロデューサー。「感性と科学」のバランスコンサルティングをモットーとし、数々のクリニックを成功に導いている。現在、光触媒による医療用空気清浄機をプロデュース中。

脳の老化が防げるのなら、
どんどん知らない人に会わなくちゃ



北青山Dクリニック

日帰り手術、予防医学、アンチエイジングの3つをメインに10人の各分野の専門医によるトータルな健康管理のサポートを行う。診療は一般外科、一般内科、血管外科、美容皮膚科のほか下肢静脈瘤、椎間板ヘルニアのレーザー治療、人間ドック、キレーションなど。
東京都渋谷区神宮前3-7-10
☎(03) 5411-3555 www.dsurgery.com

協力: 濱崎真也(東京医科歯科大学医学部非常勤講師)

High-end Society Magazine for Dramatic

addictam

アディクタム [オペラ]

Opera

奔放主義者の Love for Living 住宅芸術



gemini

DR-X